

淀川ワンドのボタンウキクサ

持田 誠*・三浦 善裕**

Pistia stratiotes L. growing in the Yodo-Gawa-Wando,
Yodo River, Osaka City

2000年（平成12年）10月10日、高知大学で開かれていた植生学会の帰りに、大阪市の淀川ワンド群へ立ち寄ったところ、大量のボタンウキクサがワンドの一角を埋め尽くしている場面に出くわした。場所は、大阪市旭区を流れる淀川の、菅原城北大橋左岸詰直下にあたる通称「城北ワンド群」である。

少し上流にあたる大阪工業大学裏手の堤防を歩いていたところ、遠目にも水面が真緑色に埋め尽くされているワンドが見えてきた。何だろうか

と近づいてみると、これが全てボタンウキクサであった（図1）。ボタンウキクサの脅威的な繁殖力は噂には聞いていたが、それにしてもものすごい量である。折しも、パワーショベルを用いて回収作業が行われていたが、一向に水面が開ける気配が無い（図2）。水揚げ（？）された個体は、そのままトラックに積まれて何処ぞへと運び去られて行く。

胴長を着て手作業で回収にあたる人の姿も見えた。話を伺ってみると「昨年まではコイツらでは



図1. 城北ワンド群の一角を占拠するボタンウキクサ

* 北海道大学農学部附属植物園；**元酪農学園大学野生動物生態研究会

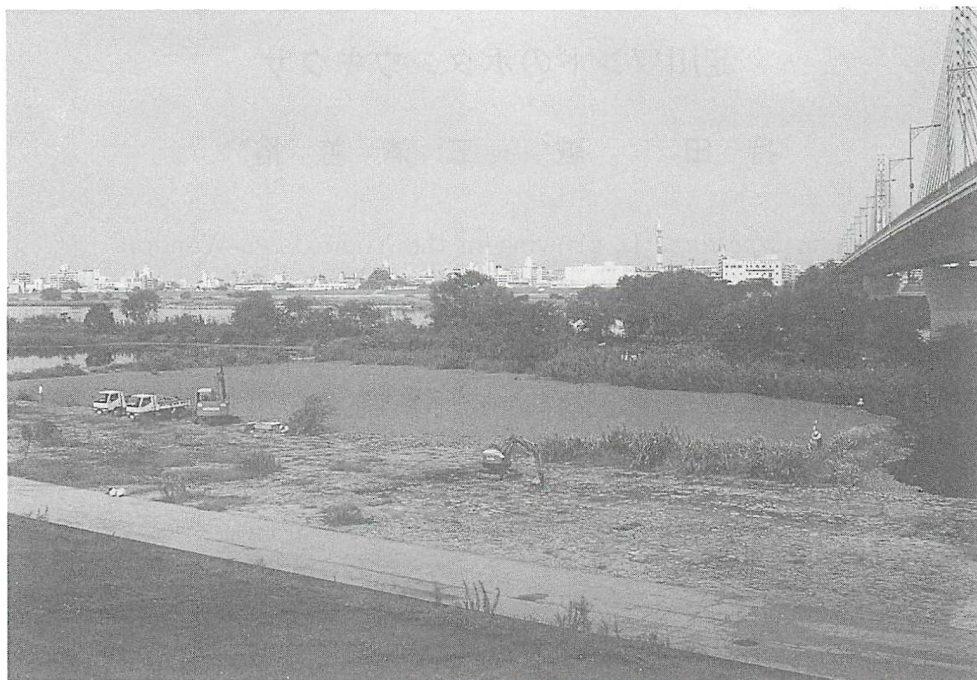


図2. パワーショベルも出動しての除去作業

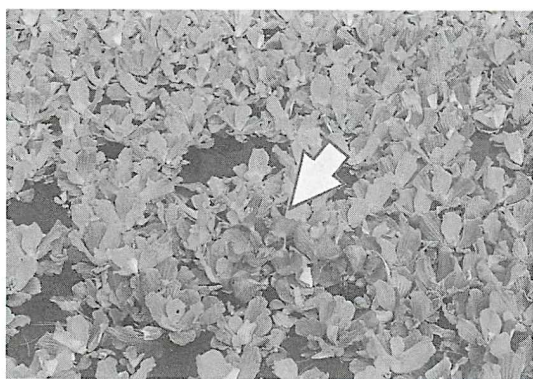


図3. 一年前まで優勢だったとされるホテイアオイ (矢印)

なくて、ほれ、アイツが一番多かったんだよ。それが今年になったら今度はコイツで一杯になって。」と言う。指し示す辺りに目をやると、押し寄せるボタンウキクサに囲まれて申し訳なさそうにホテイアオイが漂っている(図3)。「あれ(ホテイアオイ)はまだ回収し易いんだけど、これ(ボタンウキクサ)は大変だね。繋がってるのがブチブチ切れて、ちっともはかどらんで、参るよ。」

「それならば少しでも力になろう」と思った訳では無いが、標本用に幾らか私も回収(採集)した。

ボタンウキクサ (*Pistia stratiotes* L.) は熱帯アフリカ地方原産のサトイモ科浮遊植物である。我が国では昭和初期に沖縄県へ侵入・帰化したとされる(浅井, 1984)が、大正末期に刊行された『沖縄植物総目録』(坂口, 1924)に『*Pistia Stratiotes* L. var. *asiatica* Engl. ボタンウキクサ(首里・中頭・島尻)』との記載が既にあり、当地は自然分布なのかもしれない。いずれにしろ、従来は沖縄群島、八重山群島を始め、台湾など熱帯地方で広く分布することが知られていた(初島, 1971; 伊藤, 1928; 台湾植物誌編輯委員会, 1978)。また、群落分類学的にはボタンウキクサ—アカウキクサ群集 *Pistio-Azolletum imbricatae* Miyawaki et. J. Tuxen の標徴種とされ、奥田(1989)は琉球地方を本群集の北限にあたると記述している。

ところが近年、急速に分布を広げ、既に九州・四国・中国・近畿地方からの報告がある（下田，1992；角野，1995；久米，1995；藤井，1995；神谷・國井，1995；角野，1999；上赤，1999；児島，1999）。かつては冬季の低温により、九州以北での個体越冬は出来ないものと考えられ、大滝ら（1980）によると栽培にも水温15℃以上が必要とされていた。しかし、山本・藤井（1996）の大阪市での野外における栽培試験の結果、地上部は冬季に低温によって枯死するが、水底に沈んだ種子から翌春に発芽することがわかった。

一方、児島（1999）は九州における越冬状況について、熊本県の上江津湖、下江津湖では2月に多数の子株が存在しており、確実に越冬・増殖していると述べている。さらに栽培試験の結果、平均水温12℃程度では枯死することなく生育を続け、子株の形成が可能であることを明らかにした。

因みに城北ワンド群では翌2001年（平成13年）1月にも、ボタンウキクサの残骸がたくさん浮いている姿を確認することが出来た。一見、根が生きているようにも見えるが、一部を持ち帰って温室での栽培を試みたところ枯死してしまい、定かではない。既に枯死していたのか、温室に来てから枯れてしまったのかわからないのである。

一般に都市河川では、冬と言えども工場排水などが流れ込むことによって水温14～15℃を維持している箇所が部分的に存在する場合がある。このことを考えると、淀川にもそのような箇所があり越冬を可能としているのかもしれないが、はっきりしたことはこれも調べてみないとわからない。いずれにしろ、城北ワンド群におけるようなボタンウキクサの繁茂は関西圏では既に馴染みの光景になりつつあるのかもしれないが、北海道から来た私にとっては衝撃の一場面であり、驚嘆した。

今回の除去作業を見ていると、上赤（1999）が記している佐賀県のクリークにおける除去作業と様子が似ているようである。即ち、パワーショベルでいくら掘り採っても、密集しているボタンウ

キクサの、これまで立っていた葉が倒れて、すぐ横に広がり、なかなか水面が開けないのである。作業員氏が嘆く辛さもよく理解できる。

熱帯アジアでは、茹でたものに他の飼料を混ぜて豚の餌に用いる地域があり（DE Wit, 1957）インドでは人も薬に利用するとの記録がある（Cook, 1990）。

しかし、日本におけるボタンウキクサの繁茂は、ただでさえ絶滅危惧種の多い在来水草から生育場所を奪うことになり、在来種の存続に深刻な影響を及ぼす（上赤，2000）。在来種のトチカガミ群落が消滅寸前に追い込まれている事例も報告されている（角野，1999）。帰化の動向や実態調査に注意を払うと共に、帰化水草が在来水草相に及ぼす影響を訴え、人為的な導入を増やさない努力を続ける必要がある。

群雄割拠するボタンウキクサを横目にワンド群の中を散策していると、草むらの間から何やらチャポン！と音がする。そっと覗いてみると、これも帰化生物であるミシシippieアカミミガメ（通称ミドリガメ：*Pseudemys scripta elegans*：ヌマガメ科）で、小さいのが大きい方の背中にのっかかり、甲羅干しをしていた。近年、ヌートリア（*Myocastor coypus*：ヌートリア科）も居るらしい。淡水魚相が豊かと聞いているワンド群でも、外来生物の移入という深刻な脅威が押し寄せているらしい。一步、近づいた途端、大小とも瞬時に水中へと姿を消した。

ボタンウキクサに関する知見・文献について、北海道大学農学部附属植物園の山崎真実氏に助言頂いた。採集標本は北海道大学農学部附属植物園標本庫（SAP）に収蔵してある。

採集標本

ボタンウキクサ (*Pistia stratiotes* L.)

大阪府大阪市旭区生江3丁目、菅原城北大橋左岸

詰下の淀川「城北ワンド群」: Oct. 10, 2000

Mochida 000435, 000436 (SAP)

引用文献

浅井康宏, 1984. 日本でふえている水生の帰化植物. 採集と飼育 46 (7): 289-293.

Cook, C.D.K., 1990. Aquatic Plant Book 1st Edition. pp.48-50. SPB Academic Publishing, The Hague.

DE Wit, H.C.D., 1957. Aquarium Plants. pp.51-52. Blandford Press, London.

藤井伸二, 1995. 1993・1994年に採集された琵琶湖産水草標本目録と分類・生態ノート. 自然史研究 2 (11): 153-166.

初島住彦, 1971. 琉球植物誌. pp.758-759. 沖縄県生物教育研究会, 那覇.

伊藤武夫, 1928. 台湾植物図説正篇第二版. p.678. 弘道閣, 東京.

角野康郎, 1995. 神戸にもボタンウキクサ. 水草研究会会報 55: 21.

角野康郎, 1999. 絶滅危惧種の現状—水辺植物を中心に. 自然史研究 2 (15): 219-224.

上赤博文, 1999. 佐賀平野で猛繁殖したボタンウキクサ. 水草研究会会報 68: 15-17.

上赤博文, 2000. 佐賀の自然と生物多様性—水辺環境の現状と問題点を中心に—, 2-1植物. 佐賀自然史研究 6: 31-34.

神谷要・國井秀伸, 1995. 鳥取県弓ヶ浜半島で確認したボタンウキクサの越冬. 水草研究会会報 57: 22-23.

児島 清, 1999. 1998年における浮遊性雑草ボタンウキクサの発生と越冬状況. 雑草研究 44 (別): 248-249.

久米 修, 1995. 香川県にボタンウキクサ. 水草研究会会報 55: 20.

奥田重俊, 1989. “ボタンウキクサ—アカウキクサ群集” 宮脇昭編, 日本植生誌沖縄・小笠原 p.440. 至文堂, 東京.

大滝末男・石戸 忠, 1980. 日本水生植物図鑑. 北隆館, 東京.

坂口總一郎, 1924. 沖縄植物總目録. p.90. 石塚書店, 首里.

下田路子, 1992. 西条盆地（広島県）のボタンウキクサ. 水草研究会会報 46: 5.

台湾植物誌編輯委員会, 1978. 台湾植物誌 第5巻 被子植物群. p.810. 現代関係出版社, 台北.

山本博子・藤井伸二, 1996. ボタンウキクサの種子越冬と発芽の記録. 水草研究会会報 59: 17-18.

○浜島繁隆・土山ふみ・近藤繁生・益田芳樹編著『ため池の自然—生き物たちと風景』（信山社サイテック, 2001年4月, 231p, 2,500円+税）

本書に掲載されている資料によると1999年の統計で全国に205,531ヶ所のため池がある。30万と言われた時代と比べると1/3近くが既に失われたことになるが、近年、ため池の価値を見直す気運が盛り上がっている。その理由のひとつは、ため池が本来人工的な水域であるにもかかわらず、実に多様な生き物たちの生活を支えてきた貴重な水辺空間であることが認識されてきたことである。同時に、その生物多様性が危機に直面している現実も明らかになってきた。

本書では、ため池の歴史や人とのかかわりに始まり、そこに生きるさまざまな生物群が紹介される。ため池の調査や観察のためのガイドブックを目指したもので、調査や採集の方法も解説されている。他の類書ではほとんど扱われることのない生物群が動物・植物ともに取り上げられていて、特に水草関連では車軸藻類に多くのページが割かれている。これがあれば自分で名前を調べてみようという気になるくらい親切な記述である。

本書の出版を機に、今まで以上にため池に対する関心が高まり、調査が進むことを期待する。

(角 野 康 郎)